園長先生の子育てひろば

令和３年１０月

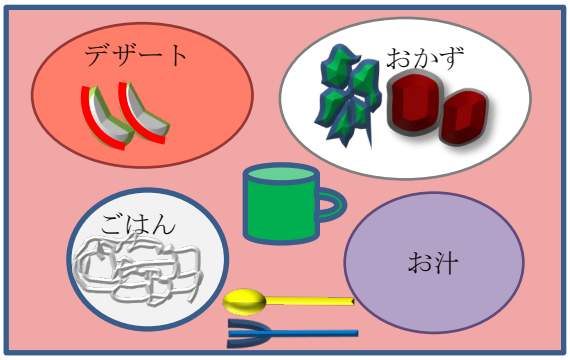
りんご丼

園長　山中　文

本園では、９月は緊急事態宣言中の感染症対策のため、給食なしで午前保育としておりましたが、１０月から給食を再開しました。

お皿の位置や食べ方など、忘れているかもしれないから、少していねいに見ていかないといけないねなどと話しながらスタートしたことでした。案の定、その初日、アッと思ったことがありました。

各自のトレーには、手前側にご飯とお汁、その後ろ側にデザートとおかずをおくように配膳しています。



食べる前、デザートの「りんご」がうっかりおかずの位置になってしまっていたので、担任が「デザートのりんごは、ごはんの上においてね」と声をかけました。
もちろん、ごはんの向こう側に置きなおしてもらうつもりの声かけでした。

ところが、ある子どもは、しっかりりんごをご飯の真上に。なんと「りんご丼」をつくりあげてしまったのでした。

たしかに、りんごはごはんの**上**になっています。
子どもの行動にまちがいはありません。「それも上だね！」と、教員同士で大笑いになりました。
そして、ご飯の向こうにおいてという意味だったと修正していたところ、その様子を見ていた子どもたち、『あ、そっちが正しいのか？』と思ったのかなんなのか、次々にりんご丼をつくっていったのでした。

そういうつもりじゃなかったという行き違い、子どもと大人でよくあります。

以前にも書いたかもしれません。子どもが小さい頃、出張に行く前、「おみやげは何がいい？」と聞くと、すかさず「上り列車！」と答えたことがありました。そういえば、その頃その子がよく見ていた乗り物ビデオで、「きたきた、上り列車がやってきた」とナレーションが入っていたのです。その子は、きっとその列車は「上り列車」という名前だと思ったのでしょう。とてもむずかしいおみやげ注文になりました。

また、別の日、遠足のお弁当がいるという時、たまご焼きやウインナーを想像しながら「お弁当、何がいい？」と、子どもに聞いてしまいました。出てきたこたえは「納豆と汁！」。　”ああ、この子の好物を忘れてた“と思ったことでした。

子どもは大人の慣用的な言い回しを容赦してくれません。子どもとの会話には新たな発見がたくさんありますね。